

報告一

マリアかミネルヴァか

ベネディクト派修道院におけるルネサンスの学識

ハラルド・ミュラー

纓田宗紀 訳

「修道誓願の拘束さえないければ、一年や二年かまわずフランスやスペインに行くのだが^①。」ベネディクト派修道士ニコラウス・エレンボク (Nikolaus Ellenbok, 1481-1543) は、絶望的な気分のため息をもらしました。一五二五年、彼は、アウクスブルクにほど近い出身修道院オットーボイレンの荒跡の前に立ち、農民戦争がそこに残したのを見つめていました。エレンボクは、メミンゲンの町医者ウルリッヒ・エレンボクの息子です^②。父は、南ドイツの学識者集団に出入りしていました。息子ニコラウスは、ライプツィヒ、クラクフ、モンペリエで医学と天文学を学び、父を追って医者之道に進もうとしていました。と

ころが一五〇六年、彼はオットーボイレン修道院に入ります。それまでの生活と縁を切ったとはいえ、エレンボクは自身の関心を棄ててはいませんでした。まさにその関心ゆえに、オットーボイレンに最良の土壌を見出したのです。彼を受け入れたのは、修道院長レオナルド・ヴィデンマン (Leonardo Widenman) でした。エレンボクは、ある友人への手紙のなかでこの修道院長について次のように書いています。

わたしは、(中略)きわめて品格高い父なる修道院長を見つけました。彼は、正しい信仰を庇護するのと同じ

マリアかミネルヴァか ベネディクト派修道院におけるルネサンスの学識（ミュラー）

ように、よき学問を奨励しているのです。また彼は昼夜問わず、ラテン語、ギリシア語、さらにヘブライ語の書を仕入れることに精を出しています。そればかりか、ヨハネス・ロイヒリンに一筆したため、わたしにヘブライ語を教えてくれる改宗ユダヤ人を修道院へ遣わせてくださったのです。

ニコラウス・エレンボクの黄金時代の幕開けでした。彼はたしかに、プラトンが描いたような哲人王の理想像が修道院に現れるのを見たのです。しかし、それはコインの片面でしかありませんでした。まもなく彼は、同僚の修道士たちからの妨害に遭うようになり、無益でしかも危険なことをしている、という非難にさらされていることを悟ります。農民戦争によって修道院が灰塵と化すよりずっと前に、彼はそこに居場所を失くしていたのです。エレンボクがギリシア語やヘブライ語、プラトンの哲学にあまりに強く惹かれていたため、修道院長も次第に距離をおくようになっていきました。一五四二年、オットーボイレンにベネディクト派の学問拠点が設置されると、エレンボクにとってまったく耐え難い状況となりました。晩年にそこでもう一度ギリシア語と哲学の講義が聴けることを望んでいましたが、修道院長は賛成しませんでした。エレンボクはこの

挫折を乗り越えることのないまま、ほどなくして亡くなりました。

シュヴァーベン出身のある修道士の運命をこの講演の冒頭で紹介しました。というのも、ひとりの人物の生涯を追うことによって、ある本質的な問題が明るみに出るからです。その問題というのは、後期中世および初期近代に修道士たちが直面した妨害のことです。当時最新の人文主義研究に関心を向けたとき、言い換えれば――本稿のタイトルがごく簡潔に示唆しているように――キリスト教信仰の象徴人物マリアへの崇拜に傾倒するだけでなく、古典古代を模倣し、かつ知恵と芸術の守護女神ミネルヴァによって体現される教養や知識に傾倒したとき、彼らはその妨害に直面しました。これら具体的な妨害は後に取り上げることになるでしょう。まず第一に、人文主義へのどのような理解が本論の基礎にあるのか、そして後期中世のベネディクト派修道院の世界における人文主義的教養の浸透具合が一般的にどのような状況にあったのか、ごく簡単に概観する必要があります。第二部では、修道院における人文主義的教養がもたらした教訓を手短に述べ、最後に第三部では、ある典型的な論争のシナリオの考察へ至ることとします。

一 人文主義と修道院

わたしたちは、ルネサンス時代の教養という領域を、人文主義の概念でレッテル張りすることを常としてきました。しかしながら、人文主義というのは非常につかみどころのない用語であるため、それがいかなる意味で用いられるべきかあらかじめ述べておかねばなりません。わたしには、パウロ・オスカー・クリステラーが構想した、文法・修辞学・詩学・歴史学・倫理学のカリキュラムを備えた人文学の研究 (*studia humanitatis*) への厳密な態度を用いるだけでなく、人文主義の基本的な考え方を強調することもある効だと思われます。それはすなわち、文法・文体が中世のものと混ざり合っていないラテン語によつて開かれる、古代文化への総体的な回帰です。しかしそれでも、人文主義者たちがそこから広く学ぼうとしていた著作家自身や彼らの著作は、言葉の美しさ以上に目を惹くものでした。それゆえ、修道士として人文主義的教養に取り組む者は、実に必然的に、キリスト教の歩みの外にあるテキストにも関わることになりました。こうしたテキストは、修道院の世界に取り入れられたのでしょうか。あるいは、それらを読む行為は、比喩的な意味で修道院の囲壁からはみ出たものだったのでしょうか。

史苑（第八一卷第一号）

キリスト教徒と古代の学知との関係は、常に両義的でした。というのも、「古代」は、キリスト教的古代だけでなく、年代的に相前後するギリシア語・ラテン語の異教的古代をも意味するからです。すでにアウグスティヌス (Augustinus, -430) は「異教徒の技芸」 (*artes gentium*) に大きな価値を認め、異教徒の知恵を素材としてキリスト教徒の知恵へと発展させること、つまり異教の学問をキリスト教のために作り変えることを勧めています。その際、未知の知識の扱いは、常に機能的な枠組みに組み込まれました。この機能上の制御を完璧に実現させたのが、ヒエロニムス (Hieronymus, -420) です。もし彼に、背景にある文化も含めたギリシア語とヘブライ語の確かな知識がなかったとしたら、多くの断片的なテキストから中世のラテン語標準版となるウルガータ聖書を作ることはできなかつたでしょう。その仕事によつて知られるヒエロニムスは、「書斎のヒエロニムス」というさまざまな形を変えて用いられる図像モチーフのなかで、古代異教の知恵をキリスト教徒のために利用する象徴人物として現れています。しかし、中世の最も有名な聖人伝集であるヤコブス・デ・ウォラギネ (Jacobus de Voragine, c.1230-1298) のいわゆる『黄金伝説』は、正反対の出来事を伝えています。

ある時期、彼（Ⅱヒエロニムス）は、昼はキケロを、夜はプラトンを一心不乱に読みふけていた。旧約聖書の修辭的でない文体がどうにも気に入らなかったのである。ところが、四旬節もなかばになったころ、高熱に襲われ、まわりの人々は彼の死も覚悟した。突然、ヒエロニムスは、裁きの御座の前に連れていかれ、どのような信仰をもっているかと尋ねられた。彼は答えた。「わたしはキリスト者です。」すると、裁き主は言われた。「あなたは嘘をついている。わたしの知るかぎり、あなたはキケロの崇拜者であって、キリスト者ではない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだから。」ヒエロニムスは何も言えなくなつた。裁き主は、彼をきびしく打たせられた。そこでヒエロニムスは、大声をあげて言った。「主よ、わたしをあわれんでください。」続けて、「主よ、もう二度と世俗の本は手にいたしません。もしそういうことがありましたならば、あなたを否定したと言われてもかまいません。」このように誓約すると、はっと意識がもどった。見ると、涙でびしょぬれになり、裁き主の前で打たれたために、肩にたくさん青あざが残っていた。それからというもの、ヒエロニムスは、以前異教徒の本を読んだときと同じ熱心さで、聖なる書物を読むようになった。

このいわゆるヒエロニムスの折檻の夢は、キリスト教会と古代Ⅱ異教的な知・テクスト・著作家との両義的な関係を明瞭に表しています。これらはすべて、信仰の利に資するかぎりにおいて許されました。それ自体があまりに重要性をもちすぎたり、テクストそのものへの貪欲な関心が影響力をもったりすれば、度が過ぎるとみなされてたちまち容認されなくなつたのです。

古代の著作家に依拠して確かな言語・知性を養成することの有用性、ひいてはその不可欠性には、なんら重大な疑念はないでしょう。ただし、こうした養成は単に過渡期段階、すなわち *pueritia* — 成熟した精神の持ち主であればすぐにクリアできることもたやすいこととみなされませんでした。多くの場合、このことは後期中世にもあてはまります。古代のテクストを用いた聖職者の言語・文体教育はおおいに歓迎すべきことではありましたが、読む者が望ましくない思想で汚され、墮落する危険があつたため、聖職者たちは内容自体には入り込まなかつたのです。古代のテクストを役立てることと、知的世界への不要で実に危険な回帰。容易には定められない両者の境界線をめぐっては、後の時代にも論争と衝突が展開しました。

二 修道院における人文主義的教育の利用について

修道院において人文主義的教育が有益であったことは言うまでもありません。「著作家・著作の」ちよつとしたカタログであればすぐに作ることができます。冒頭には言葉遣いを改良した説教が挙げられるでしょう。修道士、とりわけ托鉢修道会士を批判する者たちが好んで繰り返し引き合いに出したのは、説教師たちが雄弁な演説家という理想にはそぐわなかったことです。むしろ彼ら説教師は、たとえばポッジョ・ブラッチョリーニ (Poggio Bracciolini, 1380-1459) からは、「吃音の猿」(simiae)と揶揄されました^⑩。

写字室もまた、人文主義的素養が蓄積する場となりえました。一五〇〇年ごろには、修道院における文字文化をさらに改良する傾向がみられます。写字室の目下の使命は、修道院で使用するテキストを生産することでした。すでに六世紀の聖ベネディクト戒律のなかでも、読書は修道士の多様な仕事の一部であり、礼拝を執り行うために不可欠な術であり、同時に瞑想によって神を認識するための基礎とされています。神を認識することは、同じテキストを何度読み、それについて思索することに裏づけられています。読むことは、それゆえ厳格に目的づけられた行為だった。

たのです。読書には、正典とは言わないまでも、テキストの選定が求められました。この点で新しいものを導入する余地は非常にかぎられていたため、シュトゥットガルトのネレスハイム修道院において、食卓で詩編などを読み上げさせるのではなく、修道院長がみずから作成した古代の哲学者セネカの著作の抜粋集を朗読に取り入れるというのは、いまだ特異なことだったと言えます^⑪。

最後に、修道院の図書室に目を向けると、一五世紀には書物の扱いにいつそう慎重になっていることがわかります。芽生えつつあった人文主義は、すでに蔵書の増加をもたらしていました^⑫。実際に修道士のなかにも、まぎれもない本の虫を見つけることができます。司書として所属修道院で働く者もいれば、アウクスブルクのファイト・ビルトのように、地元の印刷業者の製品を同じくする周辺地域の修道士たちに卸す者もいました。ライン中流域に位置するシュボンハイム修道院のベネディクト派修道士ヨハンネス・トリテミウス (Johannes Tritemius, 1462-1516) は、このシーンにおいて抜きん出た存在です。彼は二〇〇冊を超える書物を収集しましたが、そのなかの相当数がラテン語とギリシア語で書かれた古代のテキストでした。ある来客は、その圧倒的な図書室を次のように描写しています。

マリアかミネルヴァか ベネディクト派修道院におけるルネサンスの学識（ミュラー）

もし、われわれのゲルマニアにヘブライ語やギリシア語のアカデミーのようなものが存在するとすれば、それはシュポンハイム修道院のことでしょう。（中略）実に、シュポンハイム修道院は、修道院長ヨハンネス・トリテミウスのはからいにより、ゲルマニアが古代や学問に關して書物として備えうるものは何でももっているのです。¹³

修道生活と人文主義的な教養への関心を結びつけることは自明ではありません。だからこそトリテミウスとシュポンハイム修道院は、「修道院人文主義」なる理念の広告塔なのです。その理念は——もしあったとしても——例外的な場合にのみ存在したのですが。では、いったい誰がこの膨大な蔵書を利用したのか、問わねばなりません。その答えはいささか地味なものです。それは、外部の知識人、たとえばコンラート・ツェルティス（Conrad Celtis, 1459-1508）やヴィリバルト・ピルクハイマー（Wilibald Pirckheimer, 1470-1530）といった著名な人文主義者たちでした。シュポンハイムの修道士たちは、それらのテキストを利用していなかったようです。一五〇六年、争いによってトリテミウスが修道院を去らざるをえなくなったとき、彼の蔵書——とりわけギリシア語で書かれた手稿本——が売却されました。修道院にとって利用価値がないという理

由でこれらのテキストの売却を命じたのは、他ならぬ、シュポンハイムが属していたブルスフェルト改革連合の修道院長でした。¹⁴トリテミウスとシュポンハイム修道院は、一四九六年の時点では依然として人文主義者の仲間たちから称賛を受けていました。

われわれは、宿主のヨハンネスが、ディオニシウス・アレオパギタを一語一語翻訳しているところを目の当たりにしました。その作業は、われわれが断念したものでした。修道院長はギリシア人然としており、修道士たち、犬、石、低木もギリシア風でした。まさに修道院全体がイオニアの中心にあるかのようにでした。¹⁵

古代の田園のようなベネディクト派修道院。人文主義と学者修道院長への熱狂ぶりが、ここでは幻覚のように閃光を放っていました。トリテミウスの犬はギリシア語の掛け声を叫べば曲芸を披露してくれる、という噂が流れたのも尤もなことでした。一〇年後、シュポンハイムの修道院長は、この牧歌的な高揚の代償を払うことになりました。彼は修道院を去らなければならず、長年巡察士を務めたブルスフェルト連合からのもはや支援を受けられませんでした。ヴェルツブルクへ身を引いたトリテミウスは、知的活

動においては一八〇度方向転換しました。以前付き合いのあった著名な人文主義者たちとの接触は途絶え、くせのある歴史解釈や黒魔術への偏向がますます顕著になったのでした。^⑩

一五世紀の修道院改革が肥沃な土壌を提供しなかったことを示すのは、この例だけではありません。研究上好んで述べられてきた修道制の内部刷新と人文主義の流行との相乗作用は、別のテーマ領域でも示されているように、誤った推論に拠っています。修道院改革とは、その本質を繰り返し再考することでした。それは *reformare* — 形を整え直す — に由来する考え方です。無駄なものは退けられ、伝統的に存在する修道生活の中心理解は強化されねばなりませんでした。典札の執行と修道院の経済基盤を確保することが、なによりも重要だったはずです。広く教養を身に纏った修道士たちの存在は、そのためには必要ではありませんでした。以前にも増して、新しい言語形態、新しいテキスト、つまるところまったく新しい権威を使って実験するような状況ではなくなっていました。これについては、一四三七年に発布されたベネディクト派修道院の図書室設置に関するバーゼル公会議の指示が規準となっています。その最も重要な規定は、本棚は門と鍵をかけて入念に管理されるべきこと、という人文主義的関心のかけらもない内容でした。

人文主義は、個人的嗜好の産物として、文字通り保守的な修道院文化やスキマのなかでしか、花開くことができなかったのです。^⑪

三 修道院生活における紛争

トリテミウスとは違って修道院長ではない者にとって、人文主義的関心に合うスキマを見つけるのは非常に難しいことでした。トリテミウスの弟子のひとり、アウグスティヌス律修参事会員ルトガー・シュカンバー (Rutger Schamber, 1456-1514) は、裁量権のない者がたどったとりわけ哀れな例です。不安定な生活を送る彼は、現在のオランダにおける「新しい敬虔」 (*Devotio moderna*) の学派から、ヴィンデスハイム修道院連合の多くの修道院へと渡り歩きました。ルトガーには三重の欠点がありました。せいぜい並みの才能にしか恵まれず、それでも並外れて虚栄心が強く、第三に、ごく短期間に仲間を敵に回すことに長けていたのです。それゆえ彼は、自身をとりまく環境から評価されずに粘り強くもがく者の典型に陥り、ますます孤独へ滑り落ちていきました。ルトガーは、この埋め合わせを修道院の外に求め、著名な知識人を好んで彼らに文通をせがみました。コンラート・ツエルティス、エラス

マリアかミネルヴァか ベネディクト派修道院におけるルネサンスの学識（ミュラー）

マス（Desiderius Erasmus de Rotterdam, 1466-1536）、コンラート・ポイティンガー（Konrad Peutinger, 1465-1547）といった著名な人文主義者の手紙はまるでトロフィーのようなもので、少なくとも一時的に、自分の置かれた状況への挫折感を忘れさせてくれました。ルトガー・シュカンバーがどれほど学者サークルに囲まれることに憧れたのか、彼がつけていた一連の著名人との手紙の控え帳が示しています。ただひとつ欠陥がありました。それらの人物に宛てた手紙が彼の独居房を出ることは、一度もなかったのです。手紙はまったく架空のものでした。彼が書いた演説もそうでした。演説は、同僚の修道士や門下生に向けたものでしたが、修道院で完全に孤立していたため、彼曰く、独居房で椅子や靴や靴下を聴衆に見立てて講じなければなりませんでした。もちろん、彼の修辞の成果が喝采を浴びることなどありえませんでした。¹⁴

人文主義に関心をもつ修道士は修道院の環境に絶望することがあった、という印象が得られます。加えて、ほとんどのベネディクト派修道院は都市から離れたところに位置し、定住の掟（*stabilitas loci*）が、修道士たちを絶えず修道院に縛りつけたという厳粛な事実があります。人文主義の中心がとりわけ南ドイツの帝国都市といくつかの大学周辺にあることに鑑みると、このことは、そもそものくわ

ずかな修道士しかそうした環境に直接触れる機会をもたなかったことを意味しています。アウクスブルクのファイト・ビルトは、そのような恵まれた環境に身を置く修道士の一例です。彼の修道院ザンクト・ウルリッヒ・アフらは、アウクスブルクの中心地にありました。レーゲンスブルクのザンクト・エンメラムにも同じ基本条件が当てはまります。ビルトが知識人サークルに参加するためには、外出許可さえあればよかったです。彼はそれを認められ、しかもいつでも好きなときにコンラート・ポイティンガーに会いに行つてよいという約款つきでした。¹⁵ それに対して大半の修道士は、大学や都市的環境から遠く、人里離れた修道院で一生を過ごし、賑わいをみせる書籍市場や人文主義の学者集団からは縁遠いものでした。古代のテキストへの関心は、必然的に彼らを修道院の狭隘な世界の外へ連れ出すことになったのです。彼らは手紙を通じて、へその緒でつながるようにして修道院外の人文主義者と連絡を取りました。読むためのテキストを手に入れ、批評を求める手紙とともに自身の著作を送りました。とりわけ絶え間ない手紙のやりとりは、この人文主義者グループへの帰属を途切れさせませんでした。文通によって、修道院の壁の中にいる修道士であっても学問的議論の応酬に参加することができたのです。この帰属意識は、修道院内で猜疑の目でみられたり、

果ては敵意を向けられさえたときには、格別の支えとなりました。⁽²⁰⁾

このことをより詳しく追うために、オットー・ポイレンのニコラウス・エレンボクに話を戻しましょう。行動力あふれる彼は、修道院外の知識人との接触を求め始めます。アウクスブルクの書記官コンラート・ポイティンガーのために古文書を求めて修道院の文書庫をくまなく調査したり、一五〇九年からはロイヒリンの助けを借りて旧約聖書の言語に挑戦したりしました。彼は同僚の修道士の不信や妨害を招くことになりました。なぜまったく知りもしない言語と格闘するのか、エレンボクの同僚たちは理解しようとしませんでした。⁽²¹⁾ エレンボクの弁明は、鏡となつて彼が受けた非難をあらわしています。

おまえは、(中略)わたしの研究が戒律に反していると咎めた。だが、わたしにだつて無駄なことに割く時間はない。わたしがギリシア語とヘブライ語の文献の研究に充てる時間、おまえは悪習にふけていてではないか。⁽²²⁾

当初は有益な時間の使い方をめぐる人文学者エレンボクと修道院の農場管理人シクストウス・スヴェルツの私的な口論のように思われたこの議論は、その後すぐにより本質

的な次元へ高まります。エレンボクは続けて言いました。「人文主義に関する物事がわからない者が、古くからある誤りを正そうと努める者を忌まわしい数寄者と非難することとは、われわれの時代にはよくあることだ(中略)」。要するにエレンボクは、古い言語の研究を、信仰の誤りを正す必要性によつて正当化したのです。この相反する二つの立場が、彼の人生に常に付きまといました。一方で、修道院にいながら修道誓願にそぐわないことで時を過ごしているという非難が、他方で、それは個人の好奇心(*curiositas*)ではなく、間接的・機能的に信仰の深化に資する研究であるという反論が繰り返されました。⁽²³⁾

エレンボクは、一五一六年の別の手紙のなかで、自分には乏しい学才しか備わっていないことを認めています。今や多忙な修道院の管理人となつた彼には、研究に割く余暇はごくわずかしかなかった⁽²⁴⁾。言語と哲学に関する彼の研究の方針を表すためにミネルヴァが暗示されている箇所は、これひとつではありません。格言と化しているキケロのかの一節をこの文脈で用いていないとしても、強情にもエレンボクは、彼を苦しめる者に対してこの武器を向けています。「*Quid enim sus Minervam docebit? — 豚がミネルヴァに何を教えることができようか*」⁽²⁵⁾ 換言すれば、「まぬけが賢者に教えることなどあるものか」⁽²⁶⁾。

修道院長とエレンボクの友好関係が冷え込み、修道院長がギリシア語・ヘブライ語の草稿本を購入するための資金繰りを拒否し、ついにエレンボクが大学へ通うことさえも禁じたのち、エレンボクは、本質的な対立状況をこの上なく明瞭に定式化する文句を述べています。

わたしは、何にもまして無学な同僚のことでもいつも腹を立てています。彼らは「教養はうぬぼれをもたらす」ということわざが口癖です。愛する兄弟よ、あなたには、修道士同士遠慮なく話せるだろう。あなたは、昨今の修道院長たちが、修道士が学者となることにどれほど激しく抵抗しているかご存知でしょう。いつも彼らがこう言っているのを聞きます。「学問はうぬぼれを生む、愛だけが人間を陶冶するのだ」と。しかし、惨めな者たちは、学問とともに愛も修道院から逃げ去っていることにまったく気づいていません。多くの無知で無学な修道士たちは目に付いても、愛や隣人愛に身を捧げる者は残念ながらごくわずかです。実際には、学問が愛の邪魔をするなどなまじったくなく、両者が互いに両立できないほどに愛が学問の負担となることもまったくないのです。（中略）いつか、愛が学問とともに修道院へ帰ってくることを、ミネルヴァと愛が親密な伴侶となることを、隣人愛

の思想のみならず学識にも満ちた修道士が再びみられるようになることを願っています。²⁴⁾

エレンボクは、教育を妨げる修道院の風潮を嘆いています。その風潮は、コリント人への第一の手紙にある使徒パウロの言葉（「知は誇らせ、愛は建てる」）に杓子定規に依拠しており、とりわけ修道院長たちはこれを教育責任からの言い逃れに利用しました。²⁵⁾ 学問は、キリスト教の中心的な理想のひとつである愛（*caritas*）に対置されたのです。

二つの中心思想の論争的対置——かたや学識、かたや修道士の隣人愛——は、ギリシア語・ヘブライ語のテキスト、あるいは古代や異教の著作家に傾倒する修道士を奇人たらしめただけでなく、修道院が共有する理想を捨てる者、修道生活の戒律に反するふるまいをする者と非難して汚名を着せました。詳しくみると、こうした厳しい批評は二通りに分かれています。ひとつは時間の浪費、もうひとつは無為（*otiositas*）というものです。無益な気晴らしのひとつとされる人文主義研究は、運動と瞑想を交互に行うことを定めた修道院における非常に几帳面な過ごし方とは相容れないものでした。とはいえ、ただの怠惰は誹謗中傷の的として十分でなく、対象物が重要でした。また、人文主義者たちが心の底から夢中になったテキストは、修道制において

数世紀来読むに値するものとして作り上げられ、繰り返し認められてきた書物の範疇の外にあつたために、放縱な好奇心 (*curiositas*) との非難が、その問題をいつそう深く襲いました。好奇心は、こんにちでは肯定的な意味で使われており、それは子どものみならずとも文字通りの学びへと導くものとされています。しかし、先述の論争の文脈では、好奇心 (*curiositas*) は人間の傲慢な行為―神が人間に与えたことを知るのみで満足せず、みずから探求しようとする―を意味しています。服従と恭順を生活の主たる理想に選んだひとりの修道士にとって、そのような烙印にはことさら重みがありました。好奇心 (*curiositas*) への非難は、人文主義に関心をもつ修道士が、新たな知識を身に着けただけでなく、慣習から離れて新たな権威を開拓したことを明るみに出しているのです。

ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の言語能力を投入して、聖母マリアを讃える聖人伝や巧みな詩を書くことであれば、許容範囲内でした。マリアに仕えるための人文主義的教養―そう絞って表現してよいでしょう―は、一貫して修道院の理想に適合するものでした。しかし、マリアその人のためにラテン語を磨くこと、すなわちキクロないしプラトンのテキストとの徹底的な対話は、権威論争を招かざるをえませんでした―まさにヒエロニムスの折檻の夢が当

時の人々に見せたとおりです。ここで世界は、和解の余地のないほどに切迫した「修道士間の」修道院内論争に遭遇しました。学問か兄弟愛か―あるいはエレンボクの言葉を借りれば、愛 (*caritas*) かミネルヴァか。しなしながら、最後に引用した一節の末尾でエレンボクが展開したビジョンは、二つの領域の密な共存を示しています。ミネルヴァと愛は、手に手を取りあっているのです。修道院で高められた教養は、同時にそこで高潔な生活を促したことでしう。とはいえ、それはビジョンのままであったのですが。

古典語の研鑽に身を捧げ、古代Ⅱ異教世界のテキスト、著作家、そして権威を我がものとした修道士は、まちがいに存在しました。それでも、独自の人文主義的修道院文化に至ることはほとんどなかったのです。これは、必ずしも修道会や修道院における構造上の障害のみによるものではありません。修道士たちは、人文主義的嗜好ゆえに自身の修道院でしばしばつまはじきにされ、個人的な対立にさらされたため、志を同じくする者を修道院の外に探し求めなければなりませんでした。彼らは、同僚たちから調和的なふるまいを求められていることは自覚していました。つまり、ところ修道士たちは、最終的に二人の指導者のうちひとりを、同時にひとつの権威のコスモスを選ばなければならなかったのです。マリア、あるいはミネルヴァを。

註

- (1) “..si obedientiae me nexus non ligaret”, Andreas Bigelmair and Friedrich Zoepfl (eds.), *Nikolaus Ellenbog, Briefwechsel, Corpus Catholicorum* 19/21, Münster, 1938, pp. 195-96, nr. 4.18, 1525 Mai 4, an Christoph Mentzinger, Zitat p. 195. 趣味の芸術に没頭するべく、しばしのあいだ修道院を逃れていたのは、ベネディクト派修道士ヨハンネス・ルイシュである。彼は、ケルンの聖マルティン修道院 (Groß St. Martin) を離れ、ロープで絵を描いた。ルイシュについては次の文献を参照。Peter Meurer, “Der Maler und Kartograph Johann Ruysch († 1533). Zur abenteuerlichen Biographie eines Kölner Benediktiners an der Schwelle der Neuzeit”, *Geschichte in Köln*, 49, 2002, pp. 85-104. — なお、本稿は次の既発表論文を改変したものである。Harald Müller, “Maria oder Minerva: Möglichkeiten und Grenzen humanistischer Betätigung in spätmittelalterlichen Benediktinerklöstern”, in Peter Schmid and Rainer Scharf (eds.), *Gelehrtes Leben im Kloster. Sankt Emmeram als Bildungszentrum im Spätmittelalter*, Munich, 2012, pp. 103-17.
- (2) エレンボク、彼の手紙、人文主義への順応に ついては次の文献およびその文献目録を参照。Gerald Dörner, “Ellenbog, Nikolaus”, in Franz Josef Worstbrock (ed.), *Deutscher Humanismus 1480-1520. Verfasserlexikon* 1, Berlin, 2006, col. 600-14 ; Harald Müller, *Habit und Habitus. Mönche und Humanisten im Dialog. Spätmittelalter und Reformation* N. R., 32, Tübingen,
- 2006, pp. 245-93; Harald Müller, “Ellenbogs Bücher, oder: Wie man eine Bibliothek auch benutzen kann”, in Andreas Fickers et al. (eds.), *Jeux sans frontières? Grenzgänge (in) der Geschichtswissenschaft. Festschrift für Armin Heinen zum 65. Geburtstag*, Essen, 2017, pp. 79-88.
- (3) Ellenbog, *Briefwechsel*, pp. 34-35, nr. 1.53, 1508 Nov. 7, an den Kemptener *musicus* Alexius Wagner: “Caeterum gratulari te mihi velim de foelicitate mea, quam nactus sum in abbate patre meo dignissimo, qui tam politiores fovet literas, ut fidem superet. Laborat ille dies noctesque, ut codices, non Latinos modo, verum et Hebraicos ac Graecos conquirit. Pro neophyto praeterea ex Hebraeis converso, qui me in Hebraeo instituat, ad Capnioneum, virum doctissimum, scripsit.”
- (4) 定義に關しては、次の文献が簡潔な概観を提供している。Lewis W. Spitz, “Humanismus”, in *Theologische Realenzyklopädie*, 15, Berlin, 1986, pp. 639-61; Robert Black, “Humanism”, in Christopher Allmand (ed.), *The New Cambridge Medieval History*, 8: c. 1415-c. 1500, Cambridge, 1997, pp. 243-77; Gerrit Walther, “Humanismus”, in Friedrich Jaeger (ed.), *Enzyklopädie der Neuzeit*, 5, Stuttgart, 2007, col. 665-92. 人文主義を厳密に定義する上での問題性、よくに修道院の生活空間に ついての問題に ついては、次の箇所を参照。Müller, *Habit*, p. 15-55.
- (5) Müller, *Habit*, pp. 106-36; Harald Müller, “Nutzen und Nachteil

humanistischer Bildung im Kloster", in Thomas Maissen and Gerrit Walther (eds.), *Funktionen des Humanismus. Studien zum Nutzen des Neuen in der humanistischen Kultur*, Göttingen, 2006, pp. 191-213.

- (9) Aurelius Augustinus, *De doctrina christiana* 2.39, 58-61 アウグスティヌス〔加藤武訳〕『キリスト教の教え』（教文館、一九八八年）。当該箇所では、共同生活に役立つ人間の学問と並んで、歴史学が有益なものととして明確に位置づけられ、それに対して数学と弁証法は無益とみなされている。加えて、聖書理解の助けとなるような異教の学問も許可可能とされている。キリスト教信仰に（偶然にも）利用できるものをもたらさしめるプラトンのような哲学者は、かつてモーセがエジプトの学問を身に着けたのと同じように、役立てるべきである。この場合、（人間の）教えから、キリスト教の教えと解釈されざる知恵への転用関係が非常に重要となる。Peter Prestel, *Die Rezeption der ciceronischen Rhetorik durch Augustinus in De doctrina christiana, Studien zur klassischen Philologie*, 69, Frankfurt am Main, 1992, pp. 78-96.
- (7) 修道士の独居房内での学問に対して「書斎のピエロニムス」がもつ象徴的機能については、次の文献を参照。Ernst H. Kantorowicz, *Die Wiederkehr gelehrter Anachorese im Mittelalter*, Stuttgart, 1937, reprinted in idem, *Selected Studies*, Glückstadt/ New York, 1965, pp. 339-51 (pp. 350-51); Kaspar Elm, "Monastische Reformen zwischen Humanismus und Reformation", in Lothar Perlt (ed.), *900 Jahre Bursfelde. Reden und Vorträge zum*

Jubiläum 1993, Göttingen, 1994, pp. 59-111 (pp. 59-63, mit Literatur)。次の文獻では、法学者ロベーンヌス・バン・レントフ (Johannes Andreae, c. 1270-1348) の墓碑を例として詳細に解説されている。Andrea von Hülsen-Esch, "Primus inter pares – primi inter pares. Gelehrte unter sich und innewegleichen", in Yuri L. Bessmertny and Otto Gerhard Oexle (eds.), *Das Individuum und die Seinen. Individualität in der okzidentalen und in der russischen Kultur im Mittelalter und früher Neuzeit*, Göttingen, 2001, pp. 169-207 (pp. 182-87)。

- (8) Richard Benz (ed.), *Die Legenda aurea des Jacobus de Voragine*, Heidelberg, 10. Aufl. 1984, p. 757. ここで引用したテクストには筆者が改変を加えている。詳細は次の文獻を参照。Klaus Schreiner, "Von dem lieben herrn sant Jheronimo: wie er geschlagen ward von dem Engel. Frömmigkeit und Bildung im Spiegel der Auslegungsgeschichte eines Exempels", in Johannes Helmuth and Heribert Müller, *Studien zum 15. Jahrhundert. Festschrift für Erich Meuthen I*, München, 1994, pp. 415-43, bes. pp. 422-23. 古典作家とキリスト教を歴史的議論の軸として扱った研究として、次の文獻が挙げられる。Denis Hay, "Humanists, Scholars and Religion in the Later Middle Ages", in Keith Robbins (ed.), *Religion and Humanism. Papers Read at the Eighteenth Summer Meeting and the Nineteenth Winter Meeting of the Ecclesiastical History Society, Studies in Church History*, 17, Oxford, 1981, pp. 1-18. キリスト教と学問との

マリアか、ミネルヴァか、ヘネディクト派修道院におけるルネサンスの学識（シユラー）

- らテーマに関する歴史学的概観として、次の文献も参照。
Laetitia Böhm, “Meditation – Wissenschaft – Arbeit. Zu einer historischen Kontroverse um das Verhältnis von Wissenschaft und monastischer Lebensform”, in Michael Langer and Anselm Bilgri (eds.), *Weite des Herzens – Weite des Lebens. Beiträge zum Christsein in moderner Gesellschaft. Festschrift für Abt Odilo Lechner* 1, Regensburg, 1989, pp. 39-62, reprinted in Gert Melville et al. (eds.), *Geschichtsdenken, Bildungsgeschichte, Wissenschaftsorganisation. Ausgewählte Aufsätze von Laetitia Böhm, anlässlich ihres 65. Geburtstages*, *Historische Forschungen*, 56, Berlin, 1996, pp. 379-403 (pp. 381-91). 次の文献は、修道院における学術的なラテン語教育を正統化する必要性を指摘している。
Burkhard Hasebrink, “Tischlesung und Bildungskultur im Nürnberger Katharinenkloster. Ein Beitrag zu ihrer Rekonstruktion”, in Martin Kintzinger et. al. (eds.), *Schule und Schüler im Mittelalter*, Behncke zum AKG 42, Köln, 1996, pp. 187-216 (p. 190). なお、訳出の際には以下の翻訳を参照した。ヤロブス・デ・ウオラギネ〔前田敬作・今村孝訳〕『黄金伝説』（平凡社、二〇〇六年）（全四巻）。
(6) つれづれに詳しくは次の箇所を参照。Müller, *Habit*, pp. 106–27.

- (10) *Poggii Florentini Dialogus et Leonardi Aretini oratio adversus Hypocritism*, Hieronymus Sincerus (ed), Lyon, 1579, pp. 1-36 (p. 20): “Quos simiae saepius quam praedicantur similes ducō.” の節は次のように続く。“...ambitu

verborum feruntur inconcinno, gestu, instar asini domino blandientes, incompósito, voce sonora ac terribili, verbis mordacibus utuntur quae scurrilitatem non sapientiam redeant.” (pp. 20-21).

- (11) Virgil E. Fiala, “Humanistische Frömmigkeit in der Abtei Neresheim”, *Studien und Mitteilungen zur Geschichte des Benediktinerordens und seiner Zweige*, 86, 1975, pp. 109-29 (p. 111). 読書目録にみるベネディクト戒律の位置づけについては次の文献を参照。Jean Leclercq, *Wissenschaft und Gotterlangen. Zur Mönchsologie des Mittelalters*, Düsseldorf, 1963, pp. 21-22 and 31-32. 次の箇所も併せて参照。Müller, “Nutzen”, pp. 198-99.

- (12) Müller, “Nutzen”, pp. 200-202. 重要な諸問題については次の箇所も参照。Müller, *Habit*, pp. 26-30.

- (13) マテウス・ヘンリクス (Matthias Herbenus, 1445-1538) が、一四九五年にマテウス・ヘンリクス訪問した後、ルーベンのヨドク・ス・ベインヤン (Jodokus Beissel, -1514) に宛てて書いた手紙の中の一節。“Si in Germania nostra Hebraea aliqua Graecaue academia sit, ea Spanhemense coenobium est: ubi plus eruditionis concipere possis parietibus, quam multorum aliorum puluerulentis atque librorum inanibus bibliothecis. Quicquid enim antiquitatis et eruditionis Germania in libris habere potest: monasterium Spanhemense Trithemio procurante possidet.” Marguard Freher (ed.), *Johannis Trithemii Opera historica quotquot haecenus reperti potuerunt, omnia ... 1*, Frankfurt am

Main, 1601, Nachdruck 1966, p. 121, 1495 Okt. 18.) の書簡は‘Trithemius’ *Catalogus illustrium virorum* と題して印刷された。これに引くのは次の文献を参照。Klaus Arnold, *Johannes Trithemius 1462-1516, Quellen und Forschungen zur Geschichte des Bistums und Hochstifts Würzburg* 23, Würzburg, 1971, erweitert 21991, p. 56; Susann El Kholi, “Ein Besuch bei Johannes Trithemius: Der Brief des Matthäus Herbenus an Jodokus Beissel vom 14. August 1495”, *Archiv für mittelherrnische Kirchengeschichte*, 56, 2004, pp. 143-157.) の書簡の羅独混交版とものに次の文献も参照。Johannes Helmuth, “Perception of the Middle Ages and Self-Perception in German Humanism: Johannes Trithemius and the *Catalogus illustrium virorum Germaniam ... exornantium*”, in Patrick Baker (ed.), *Biography, Historiography and Modes of Philosophizing. The Tradition of Collective Biography in Early Modern Europe*, Leiden, 2017, pp. 177-247, mit Teiledition pp. 209-238.

(14) Arnold, *Trithemius*, p. 71.) の問題とくは次の箇所と併せて参照。Müller, *Habit*, pp. 32-47 and 194-204.

(15) ハイデルベルクの法学者ヨハンネス・ウィギリウスは、コンラート・ツェルティスへ宛てた手紙のなかで自身の感情を次の言葉で表現している。“.. hererum ingrediebatur, apud Joannem Trithemium per sex dies integros detenti. Credis tu contra voluntatem nostram? Nequaquam: omnia enim nobis correspondebant ibi pro

tempore, pro annis pro omni denique voluptate nostra. Invenimus patronum nostrum Joannem transfertentem Dionysium Atyopagitam de verbo ad verbum, quem et ita dimisimus. Erat Graecus abbas, Graeci monachi, canes, lapides, arbuta et totum istum monasterium in media Ionia videbatur situm”, Hans Rupprich (ed.), *Der Briefwechsel des Konrad Celtis, Veröffentlichungen der Kommission zur Erforschung der Geschichte der Reformation und Gegenreformation. Humanistenbriefe*, 3, München, 1934, pp. 178-82, nr. 107, 1496 April 19. (p. 179).) の文はトリタウウスがツェルティスに送ったデオニウスの『神秘神学』が話題にのぼっている。Ibid., pp. 183-84, nr. 109. ウィギリウスに引くのは次の文献を参照。Hermann Wiegand, “*Phoebæ sodalitas nostra*. Die Sodalitas Litteraria Rhenana – Probleme, Fakten, Plausibilitäten”, in Stephan Füßel and Jan Pirożyński (eds.), *Der polnische Humanismus und die europäischen Sodalitäten. Akten des polnisch-deutschen Symposions vom 15.-19. Mai 1996 im Collegium Maius der Universität Krakau, Pirkheimer-Jahrbuch für Renaissance- und Humanismusforschung*, 12, Wiesbaden, 1997, pp. 187-211 (p. 205, mit weiterer Literatur); Arnold, *Trithemius*, pp. 81-85.) の引用した一節が挿入されているのは次の箇所。Ibid., p. 79.

(16) 次の箇所にも引かれている。Müller, *Habit*, pp. 194-244.

(17) 次の箇所では体系的な調査を行った。Müller, *Habit*,

ペリプカニネルヴァカ ヘネディクト派修道院におけるルネサンスの学識 (リョラー)

pp. 79-136. 引用した史料については次の文献を参照。Johannes Helmraath, “*Capitula*. Provinzialkapitel und Bullen des Basler Konzils für die Reform des Benediktinerordens im Reich. Mit einer Konkordanz und ausgewählten Texten”, in Helmraath and Müller, *Studien*, pp. 87-121 (p. 116).

(87) Andreas Berger, *Wündesheimer Klosterkultur um 1500. Vita, Werk und Lebenswelt des Rutger Sycamber, Frühe Neuzeit*, 96, Tübingen, 2004, pp. 1-47 (Leben), 66-68, 286-87 (Briefe); Müller, *Habit*, pp. 219-30.

(61) フレーデル・ホルツゴットは次の文献を参照。Harald Müller and Anne-Katrin Ziesak, “Der Augsburger Benediktiner Veit Bild und der Humanismus. Eine Projektskizze”, *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben*, 95, 2002, erschienen 2003, pp. 27-51; Anne-Katrin Ziesak, “Bild, Veit”, in Worsbrock, *Deutscher Humanismus*, col. 190-204; Franz Posset, *Renaissance Monks, Monastic Humanism in Six Biographical Sketches, Studies in Medieval and Reformation Traditions*, 108, Leiden, 2005, pp. 133-54 (筆者による書評を参照)。*Wolfenbütteler Renaissance-Mitteilungen* 31.1, 2007, pp. 56-60 ; Harald Müller, “Der Beitrag der Mönche zum Humanismus im spätmittelalterlichen Augsburg. Sigismund Meisterlin und Veit Bild im Vergleich”, in Gernot Michael Müller (ed.), *Humanismus und Renaissance in Augsburg. Kulturgeschichte einer Stadt zwischen Spätmittelalter und Dreißigjährigem*

(リョラー)

Krieg, Frühe Neuzeit, 144, Berlin, 2010, pp. 389-406, bes. pp. 401-06. 外出許可に関する次の箇所を参照。Ibid., p. 405.

(20) 詳細は次の箇所を参照。Müller, *Habit*, pp. 67-78, 106-36.

(12) エレンボクについては上記註1を参照。オットーボインにおけるクプライ語教育の試みについては以下の箇所を参照。Müller, *Habit*, p. 258.

(23) “Impetisti me nuper verbis satis procacibus nimisque licenter studia mea carpsisti, perinde inutilibus nulliusque momenti rebus operam ipse impendam. Quod enim Hebraeae pariter et Graecae literaturae operam do, tu vito das.” Ellenbog, *Briefwechsel*, pp. 31-32, nr. 1.50, (1508), (p. 31).

(25) Ibid., p. 32. “Solent enim nostra aetate bonarum literarum ignari eos notare curiositatis, qui inveteratos errores evellere moluntur tutantes errores suos temporis diturnitate, perinde diu errasse regredi in viam sit.”

(45) Müller, *Habit*, pp. 275-76, 285-86. *curiositas* 概念の否定的な使われ方については次の箇所を参照。Ibid., pp. 111-117.

(25) Ellenbog, *Briefwechsel*, p. 147, nr. 3.17, 1516 Aug. 27, an Johannes Marquardi (nur Regest), darin: “Ego enim tenui praedictus sum Minerva, ut item in rebus agendis occupati liberum student tempus relinquunt”, Paris, BNF, ms. lat. 8643, vol. 1, fol. 22v. ホムベラは他の箇所では “*tenuis Minerva*” と言及している。Ibid., p. 116 and

p. 168, nr. 3.66, 1520 Nov. 30(nur Regest): “Curta mihi suppellex est et tenuis Minerva. Non itaque me onerabis super quam vires ferre valeant”, Paris, BNF, ms. lat. 8643, vol. 1, fol. 67v.

- (26) 例えは次の書簡。Ellenbog, *Briefwechsel*, pp. 475-77, nr. 9.82, 1543 März 28, an Konrad Peutinger: “Ne itaque diutius te suspendam, noveris hic prospere succedere Minervale munus” (p. 476). コータのコンシレート・マティアンがゲオルゲンタールの修道院設立に ついて意見を述べた次の書簡も参照。 “... vacant pedagogi ... Minerva quiescit.” *Der Briefwechsel des Conradus Mutianus*, Teil 1-2, Karl Gillert (ed.), *Geschichtsquellen der Provinz Sachsen*, 18, Halle, 1890, Teil 1, pp. 174-78, nr. 124 (1509 Ostern), hier p. 176. 次の手紙ではハムブル大学^{の法学者}の法学者のいふ後者が “alteram Minerve capacem” と述べている。Ibid., Teil 2, p. 143, nr. 483 (1515 ca. März 20).

- (27) Cicero, *Academici posteriori libri quattuor* 1.5: “Sed quid ago, inquit, aut summe sanus qui haec vos doceo? nam etsi non sus Minervam, ut aiunt, tamen inepte quisquis Minervam docet”. の言う回しは、とりわけヴェリバルド・ビルクハイマーからヨハンネス・トリテシスに宛てられた手紙のなかで使われた。その手紙では、ニールンベルクの貴族「ビルクハイマー」が追放された修道院長「トリテシウス」にアウクスブルクの職を勧めている。Emil Reicke (ed.), *Willibald Pirckheimers Briefwechsel 2, Humanistenbriefe*, 5, München, 1956, pp. 2-6, nr. 172.

ラテン語の授業を勧めるヨハンボクの文は、次の語句で始まる。Ellenbog, *Briefwechsel*, pp. 60-61, nr. 1.87, (1510 Mai-Sept.), hier p. 61: “Et ni sus (ut proverbio fertur) Minervam doceret...”. ウイルのゲオルゲンタール・リコヤルは、自身よりも優れた見せるヨハンボクに近づいた際の厚かましさを表現するために使っている。Ibid., p. 425, nr. 8.71, 1540 Okt. 7(nur Regest): “... tamquam sus Minervam docere, cum meum sensum tibi de incendiariis declarare volui.” Paris, BNF, ms. lat. 8643, vol. 3, fol. 105v. ウルリッヒ・ゲオルヘルムが回経している。Ellenbog, *Briefwechsel*, p. 446, nr. 9.19, 1522 Jan. 22(nur Regest), Paris, BNF, ms. lat. 8643, vol. 3, fol. 144v.

- (28) Müller, *Habit*, pp. 278-83.

(29) “Maxime autem omnium semper detestatus sum amosorum fratrum frequens illud dictum: «Scientia inflat». Libet, pater charissime, tecum ut monachus cum monacho liberius loqui. Scis hactenus, quam manibus et pedibus obstitierint abbates nostri, ne monachi eorum docti evaderent id unicum personantes: «Scientia inflat, charitas aedificat». Et non viderunt miseri, quia pariter cum scientia charitas de monasteriis aufugit. Inventi sunt enim monachi inscii et indocti multi, charitativi (quod dolenter recolo) pauciores quam oportebat. Vere scientia intantum non excludit charitatem nec charitas tam exosam habet scientiam, ut alterutrum se ferre nequeant. (...) Spero itaque, quia pariter cum scientia

マリアかミネルヴァか ヘネディクト派修道院におけるルネサンスの学識（シユラー）

charitas ad monasteria revertatur comienturque Charites Minervam invenianturque monachi ut docti, ita et charitate pleni." Ellenbog, *Briefwechsel*, pp. 450-52, nr. 9.27, 1542 März 14(p. 451). ハッビツト Charitas という語が、ギリシア神話の三美神よりもむしろ愛に満ちた修道士たちとして解釈される。この手紙の解釈については次の箇所を参照。Müller, *Habit*, pp. 283-89.

(30) 1 Kor. 8.1. エラスムスの風刺文が無学な修道院長たちへの非難の頂点である。"Abbatis et eruditae – Der Abt und die gelehrte Frau", in Werner Welzig (ed.), *Erasmus von Rotterdam, Ausgewählte Schriften* 6, *Ausgabe in acht Bänden, lat. und dt.: Colloquia familiaria. Vertraute Gespräche*, Darmstadt, 1967, pp. 252-65.

(31) これ以降のことについては上記註二四を参照。次の浩瀚なエッセイも非常に啓発的である。Heiko A. Oberman, *Contra vanam ciostatem. Ein Kapitel der Theologie zwischen Seelenwinkeln und Weltall*, Zürich, 1974.

(32) 語学堪能な人文主義者の手になる宗教テキストや、とりわけマリアを崇拜する詩は数多く存在する。この点で、キリスト教徒のウエルギリウスと讃えられたカルメル会修道士バプティスタ（スパンニョーリ）・マントウアヌス(Baptista Spagnoli Mantuanus, 1448-1516) が卓越している。ロンツォ・ヴァッラ（『新約聖書註解』）やエラスムスに続いて人文主義者による原典批判は聖書や聖人伝に適用された。こうしたテーマ群については次の文献を参照。Cornelis Augustijn, *Humanismus, Die Kirche in ihrer Geschichte*, 2, Göttingen, 2003, bes. pp. H47-49, H75-79, H110-

119. 次の箇所も併せて参照。Müller, *Habit*, pp. 25-26, 36(Baptista Mantuanus), 284-85 ("Bibellhumanismus"), 347-49 (Verbindung von christlichem Inhalt und eleganter Latinität). 二つの生活圏の競合といふテーマに関連するコンパクターな記述として、次の箇所も参照。Müller, "Nutzen", pp. 209-213.

（アーヘン工科大学教授）